

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

JAPAN

六月三十日



印

印

印

印

長てある細い五形葉を生ひゆう。余は其人の地名。

うまいふくやの雲雀ちり

冬の日

此卷一部の俳かいはこりく冬の季よりて冬の日と  
ソ古言ニ顯ハ一部の懶標にて。朱注冬の日ハ眞門の

万葉ある春の日も冬の日ナシ落角れキモ翁の手をもあめてハ秋時うハか  
くハナシナリト許六四冬の日ハ次韻の風調ありておはうその人解す  
きものアリ。翁ハ去歸を法拿を用ひタ

笠を長途の雨ナホこうじ紙衣ハトマツクのあ  
レヨモ先アリ黒ミ城衣と長途トトモリホこうじ便つくしたる  
主ひ人<sup>公羽ハ自ラモ云</sup>我<sup>タヘ</sup>アリキヨアル元多<sup>日ニヤサセ昔</sup>  
狂歌の才士<sup>竹齋モナシ知若井と書本</sup>比園よナシ<sup>ノ</sup>しのり  
をふほかもい出申付る

狂歌才士のオハ竹林よ似ナラフ

芭蕉

成美曰字は「ちく」時代の格調を紀白の二字あつても凡はあ貞亨  
元年尾陽よりしての吟之狂歌の二事ハ勿ニ以狂歌別々あくへき

を別々やぬうふる。これが書つたまうやうのものか。さて、この後は「  
ト」の二字を隣りの「ト」に連ね、「木部」の「ト」は、長庭の「ト」は  
ろじゆく風の「ト」である。朱注「竹齋」は業医喜狂歌住尾張名古屋後社  
江戸神田實文年間、人を救ひ正風興立。一夕冬の日一部の大変又狂句の  
二字と「たまう」と云ふ譲あり。狂句の二字ハ五巻メの壁の對ありとい  
ふ説あり。本節も狂歌よりみ残し凡人によどむこと少く。あるいは謙退の心を見  
る。よと口共引ハあらわの事も疑あり。

## 金きやさかなる室の山サキ花

野水

岩山をとかせて誰もやとひらう。十之三や、疑てとばる。  
花はさるのと利き。誰もやとまき取らる。木高すゆからしのう。

## 有明の主あるゆゆ風

荷弓

主水、官名非人偏疇。此有ゆハ正みのちの冠。きくま。トナミ。化吉  
のものね。此立文多ミ。丈多くちうみつけ。山草花のれ。根人。あ  
のよしつかよ。筋をあく。○御宿をさけやと。へきとさうやと。酒店  
協議をと。尼連へだ。比屋の主ハ家庭のやあらはる。そのやあ。比やの  
主一コを以。亦三の太さ。さるす。このて。み。潤い。た。ふを。酒店と。足あ  
はず。もの。み。ま。き。故。付。いや。よく。平。の丈。ニ。主。一。字。の。や。を。以。や。三。あ。う  
たる。こ。一。鷹。よ。房。を。考。そ。レ。兼。的。ら。ス。や。有。明。の。が。モ。リ。う。つ。ま。

ぬ解。先有明の主水と。侍官の侍臣物か。の藏人或ハ。あ。芝の加賀人。あと  
云對して。後ろ設け。うち名の物か。ハ。の藏人ハ。と。解。と。あ。のと。一首。主を  
即め。よ。子孫。性を物か。ハ。と。称。セ。う。と。前。の。人。と。有明の主水。と。あ。ト。ハ。も  
と。の。司。あ。れ。ハ。あ。く。き。と。と。相。と。を。あ。く。ま。う。り。り。ふ。く。と。て。と。あ。も  
また。え。あ。は。み。う。と。と。き。ハ。仙。と。さ。く。と。ん。う。り。と。ほ。活。か。く。と。脚。子  
第三の体。と。あ。る。と。即。と。休。む。る。す。と。つ。と。も。有。ゆ。一。め。け。と。また。酒。素。免  
る。時。ハ。下。の。て。の。字。の。脚。音。レ。あ。う。仙。と。な。見。と。と。す。と。平。の。体。と。あ。と  
つ。し。の。及。ハ。て。二。上。の。押。へ。と。は。あ。う。ハ。た。れ。と。ふ。つ。れ。と。う。出。て。品。と。あ。と

## 和らのをぬをみるあ馬

重五

井馬ハ。前。り。の。酒。を。よ。移。使。を。附。る。夷。た。ま。と。ま。と。か。ら。く。と。ハ。有。く。う。と。休。せ。て  
心。よ。き。た。ま。と。あ。る。と。ハ。一。夕。と。風。信。あ。る。○朱注「井馬」万葉集。十。め。ふ。キ。ハ。神。よ  
く。あ。駒。の。も。も。あ。田。井。を。都。と。あ。つ。五。家。内。よ。西。の。俚。言。よ。酒。を。の  
む。を。あ。馬。と。の。よ。う。よ。酒。よ。飲。と。て。な。の。す。と。も。り。よ。

朝鮮のゆきすすきのうるいあ  
杜國

高きあらゆり。をとかかれて。縫。と。つ。た。執。中。之。野。体。と。前。夕。と。度。と。た。る  
き。朱注「万葉抄」仙元日。ゆき。と。白。き。と。つ。た。て。云。匂。と。あ。き。と。つ。た。る。

日のうち

母承五年と  
正平

野  
水

寂しき庵より因つゝを見たるゝ事ニ晨氏幸若を思ひしやうとぞきの身  
をもれものゝともあたひあくまくありまゐすいりい翁  
トやもりよハ院者のみうさりままで活きよむかうとひたり化ちゆ。リキの方  
チ葉子イホトトナリハ体ト用ニ宿ミヤシトヨレバ廬作又廬入ある方  
葉屋アリマサ

おこは第のまゝせきのうをかる人こそそへけりハその人の主くさやあく  
人刺撃ハたるうふと女房ハあつて世もゆめぬきハもとハのめ  
んもりすよさくハ我輩ニえうつきやうこもりすあひいわらうくの年記す  
共に書平ハあうと義満ヨウモンよぐりてやうとたち書平ハの娘メイドを切てんく書平ハ  
をもやさんとてこむりがる内歎れども五事の方へすうじるを

前々からうて仇人とちかくあらひすまえの男又心がりし  
まちまち身の面影をおじいにてれをもとすと顛もやするの心  
いそぐまちやとあらむたまへ

きえぬそよすこ

とあく せ何弓

傳のつゝみやせ手をもとめに家主をすすりよ下の匂をもとて稚  
まと失ひたる人をつけたまこと。本ほきえぬそよすこ、手子を失ふた人をト  
ひき去のあがつあきくわんを捨て サセ蕉

前々からうそで仇人とちぎりを残し子やまほしの男又いかり  
あらまそ家の風景をおじりて家をうながすと髪もやさうるの心  
ハソウモモヤとアラシヤマ  
  
さえぬそとほすこ トあく 荷弓  
傳のつるひあせ字をひに家をあすすて下の匂をもとて雅  
まと失ひたる人をつけたま。余はきえぬそとほを失ふた人ミト  
お 法のあがつまくゆを憶て 芭蕉  
おきの墓まへてあがつきとていひわざをなう  
  
ありしじふよあえ ト虚家 杜國  
暁もく火をだく家の付かくが家ノ初冬のあき、家家あら  
田中あらざんす御者あらごろ 荷弓  
附きハ、ソシキをあえいこうよ柳のちり原のわいりきいとくわく 小ま  
人う柳よらじ。朱注伊勢山田のほんじゆうははくとよみ まことまこと云  
女あらめあまちをよ深石をねて辞世を残して方を抜けたもの原の柳を  
かまん柳をよとを又てまん柳。津の園田中あら前々のかく家を芦  
外のあらげりとえてあくと

西房よすねり人のちんもの

野水

前ニミタ波ミ角れバ柳エアリキ堵ミ是め帝ヒモカラシテけちんヒリ  
トミシテシテケル

多忙あれを候チハムもろ月あそ

杜國

是ハのぞ一らに候ムアモラハ三ロ力アミヘシミタノ日ノ解アリ前  
のああアリモヤシ。一本ニシテバシテシテ

ト高クナカキ田ムトウサホ

重五

さうシキナカツキニから月を立ちも町中リカリケレ、雲井の内ノ静  
ケキアモヒヤシキヒトフリスル人のは居テナリ又林するニ神代の卷  
コ天の吉慶录と書れしをも一めすへて小覺キアモ物語ヨカミニ今世常  
詮ヨリスルニモトテ注アモシモアヨリナシニ又サザキノ嶮岨の  
ミリテ居候キニシカガウチアリヌマシのロサシアムクサウキ併アモ  
ヤ鳴年子ノ人の語ラトクニシの言叶タヒジルアモラモのミミム

二の尼子近衛の花の十カノサク

里水

二の尼リニニ鷹ニ鷹リソラカヘ。その二の尼子宿下ミ訪ヌリクル魚簾の花  
さうを尋ヌル（あく年佐ア）

まきむくらきをかく自昇りむ 菖蕉

二の尼の参ヌハその法座ももじみかりてちのもと知りとみせども  
す蝶ハ律ヰとたゞアシテ鳥昇ルも。余注在鼻曰渕在眼曰淚。声を

參ヌルハあした眼ヲアラモテきのめハあした鼻トナカル

み物よ空虚遠顔ありうれる

重五

其人の付リテ蝶ハむくらと名るき由ナキ。歎歎と上鷹の事多モテナ  
リす。すくはすくは腰あるハ一句のきりうあ

いまそ恨の矢をむづつま

荷弓

妻化の跡もく秦の豫讓の主君の仇を報ひんおよつけね。いも所  
テ前年の座場の中ある人のおひくは義すくい。あうじてのよがひ  
ねすくの計合の座の吹かれて

芭蕉

兵主がつまうの前々ヨリキシミテ吹をぬてハシア  
その日解さる鹽くのかみみの松ハニシテの景物ヒソシヒトメ思ふ矢を放  
つハ誰ともあつそくいふ汝（ヨ矢をもあつねう）。余注美の幽々然  
投る物見の松中仙道赤坂の西ニ古松植んで今ハ享保年中ニ桂ヒシ

因字利ヨリおのほなあやうり

吉ノ 宗祇の名を付シ わ

杜國

さて熊坂う物見の松も宗祇のも美の、國の名に付して鹽人と呼ぶ  
つまよいものを對しナレハ心ハ忍子と鹽路もと此名のいじやとい  
ふ時たつてあり。朱注より宗祇う水ハ美の、國宮園川の邊ニ宗祇を白雲  
林とソふ熱水あり。又其野州宗祇法師が古今傳授手て教父  
まで送る玉ひ和歌を説きゆきと云ふ

竹まぬきて多雨をぬるゝ 小時雨 荷弓

宗祇の玉すきみを志シふ事也元て宗祇の志すの句をあてじ。古  
事もめうもつけし。北里またの事也。卷之ニ宗祇の句ナシ。世も書  
ハナシシムルカモヤモウムシト

久ツキまよひてしのぐ 座ロサ巨

野水

ちよもぬもとくの體をつけてそれがの中の鹿草のまゝにて。を  
うりとて所也。

志リと碎くへ人の身ア何 杜國

野水

參れどくすよ。跡の空す。卦をつける。かはしきのをす  
のうち部より。ハリとぬるも。もともの行儀也。  
ありまことひ詠すも。ナリとすす

野水

附記。前日のちづれを詠ふ。もとあらかじて詠ハ。即ちナリ。うるきト取  
りつて。りくまし。ひとさり。シテ。秋ハ。即ちナリ。まことに

秋あ一斗もつべすれそ

芭蕉

詠く物也。あくとも秋文一斗を長き秋もつて秋あ一斗と曲をやう  
だり。さて時日を多くてかへて季うつづき。この朱注前日の詠なりよ  
すをとしかめて秋の秋の長きさまをつけた。水一斗と漏刻をわざわざもの  
もう。又一説。秋火。酒にゆ。秋。酒の方もあくまど

日東の李白。坊。月を見て 重五

前の秋水一斗もつべ。日東の李白。對。ナリ。朱注。日東の李白。トハ

石川丈山の事ニ又酒すキ、ふ詩人アシズあるよト、ソア

中本様をもつて琵琶市

日暮の李白の内ヨリまで月見うえにとまつて黒凡あ人ニあらわす見事ナシ  
本塙のよかあ年をもむくして世をむすぶる人あらへ  
歌人アシムアノ

の跡とあくまでもの流れよ

前の中は本幢をもさみて爲まつて、やまとち氣の歌一曲ある事あらがの  
牡丹花の老人あそづかく牛の鉢牛をあそびたら、みまう牛さへりうちひうと  
所せうりんさんさて本幢の孫子もとかう牛、弔とがよし、又大和物語よ  
南院の若宮牛を傳ひよやりて又の日がよやうるねいえの牛たまきい  
へりとすよ「我の」してよとくもや消えよれあまうかくうく、君のいつのちよし  
口朱注相坂のあらあら葉寺とソラヌム牛仙のあらわんじこくちう又前の既  
翼おハ蝶丸の宮あそびへ詣る人云

蟹の魚をあさり

上總房州あらわくよこは魚を傳ふ施すゆへこの布施を貰ふりあらむにてもて  
行きまくへどりよ冬の日解の綱えと之又木檻の里あるとし牛あらぐゑる

水經

おはる  
あはるみをたう、柳の葉あはるもくと黒いくわゆ  
水里の水の音を柳の明かりにそよぎてあ

うかのあけかみの早矢ひもへ  
若ち

トヨカレのあけかみの早馬をもへく  
前々このへろといへる詞のほりとてすを祈るを附くと首よりあやしく魚  
ハ子を祈る神の生贊アシタツからあらうへしの年注東方ニ建父の本曜星春ヲ司ル  
万福ヲ祈る星の胎生タマヒナリ例えく神仙傳ニ傳説云有歲星東方朝生而魚此星

野水　ものまゆかすみゆき

孫の居湯み志が天の花  
スル

廊下八首のうち

瓦一  
六  
一  
正花の名をもつての月のゆ  
ひらひらひらひらひらひらひらひら

カヤのある川は西去り。翠ヶの事翠ヶハ頃のをこだまへ正義アテモ社云  
アナタのむしもアリテモ。年は廊下。湯屋つゝきの廊下。白氏文集。繞廊  
繁縝架又下のツナ。影アリ也アリ也

あとへとも壯年年注三十年ラ曰壯年注三十またこうらも哉  
辰ノ辰年注振衣千仞

卷之三

年  
年  
年  
年

初雪のこゑも薄うきへる 野水

ゆまよすゆるえんちやくの井の食

杜  
固

背せをいとふ人多々有りてやれの多くあてせ井の候  
うめしとよきとさりて利久のゆきと官持のまことのく人のため  
鶴鳴戯はりくみの事はるが甚角うちゆえりおもむき戒めとらうの  
よ

胆氣をもつめら様の羽あれ  
芭蕉

日暮れを一める様の如あれど  
心よりうめて考校にまづくよ  
りかにこの年注あつまつておこなつて

芭蕉

秋の日暮れに  
うつらうつらと  
荷舟

麻呂の刀袖よ鞠紋とありますへ

卷五

車の字を執中して併賛う帰朝の時より王維あるにあたる併え置つて  
さあくあれとも的字すらもよしと見えへねりあらさんさて一矢のすま古れよし  
てえまとこのを差ゆ。朱注麻呂、併て韻註。右士も王維あるの  
事つひしきんと

杭花をみがる 百々徳の口

右呂主貞信と見ゆ。『鞠敦』抗は孫ありもの又萬々ハ連の花の下より  
て花候ぬより是青々ハナミナギ長生く。『元』朱注田機活法  
『皇弄韻』桃杏皆發ト又月常住不寢の事あり也ナシモテ

雨ニ泊ま  
る

あくまひも

奥のきくさみよをいあくよれく 桂水

又冬の日解<sup>ス</sup>田螺を食て世を済<sup>ス</sup>くと云ひたとナシ<sup>ス</sup>奥の寺  
不す左近の人あくよ。未注実方朝臣の北の方あと<sup>ス</sup>仲<sup>ス</sup>や

床あけで語<sup>ス</sup>はくとこあくゆ男 荷弓

前々の人を女と見てたゞく<sup>ス</sup>吉原あらすじうつめすらうつて今宵の客  
田舎の客うて油もく<sup>ス</sup>まをなづり<sup>ス</sup>きハシミナリをひそむ。未注田

舎の客の幼き時別きし日性の就教あくへー

孤子<sup>ス</sup>まぬけの恨みのう

芭蕉

千眼一到<sup>ス</sup>場<sup>ス</sup>のかきくろ窓の所ニモ力の内立<sup>ス</sup>病<sup>ス</sup>い<sup>ス</sup>「我病<sup>ス</sup>なき」

口を<sup>ス</sup>と 痛<sup>ス</sup>をちキるちうくあす

野水

此久病<sup>ス</sup>まき<sup>ス</sup>ナリ<sup>ス</sup>病<sup>ス</sup>あら致<sup>ス</sup>ハき<sup>ス</sup>な<sup>ス</sup>。夫哉<sup>ス</sup>他<sup>ス</sup>の  
二<sup>ス</sup>自<sup>ス</sup>てお鐵<sup>ス</sup>の鉢<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>。麪<sup>ス</sup>ウロ<sup>ス</sup>人<sup>ス</sup>ノ<sup>ス</sup>字<sup>ス</sup>ニ<sup>ス</sup>痛<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup> 是ニ<sup>ス</sup>和<sup>ス</sup>也  
瘤<sup>ス</sup>シ<sup>ス</sup>皮肉腫<sup>ス</sup>起<sup>ス</sup>不癢不痛又堅強ナル者<sup>ス</sup>。未注筋病も漏<sup>ス</sup>は是<sup>ス</sup>病<sup>ス</sup>也  
ナ<sup>ス</sup>れども<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>

明日<sup>ス</sup>かあくよ<sup>ス</sup>ひそむせん 重五

芭蕉

一<sup>ス</sup>持<sup>ス</sup>お<sup>ス</sup>まち<sup>ス</sup>落<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>ナ<sup>ス</sup>。未注防戦<sup>ス</sup>術<sup>ス</sup>を尽<sup>ス</sup>きて明日<sup>ス</sup>敵<sup>ス</sup>首  
を送<sup>ス</sup>人<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>死<sup>ス</sup>宿<sup>ス</sup>を破<sup>ス</sup>るも<sup>ス</sup>勇士<sup>ス</sup>付<sup>ス</sup>

小三太<sup>ス</sup>ふ<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>さしつ<sup>ス</sup>ねひ 芭蕉

芭蕉

勇士の氣象<sup>ス</sup>あめうへ<sup>ス</sup>。水滸傳<sup>ス</sup>力<sup>ス</sup>フロ<sup>ス</sup>のを<sup>ス</sup>ミ<sup>ス</sup>ね<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>。未注名  
残<sup>ス</sup>の酒宴<sup>ス</sup>小性<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>三太<sup>ス</sup>ふ<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>さしつ<sup>ス</sup>ねひ

肉<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>舞<sup>ス</sup>がき 杜舟<sup>ス</sup> 俗<sup>ス</sup> ト 杜國

度<sup>ス</sup>の附<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>凡<sup>ス</sup>雅<sup>ス</sup>に<sup>ス</sup>庄前<sup>ス</sup>杜舟<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>豈<sup>ス</sup>ま<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>先<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>敷<sup>ス</sup>詮<sup>ス</sup>ち<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>せ<sup>ス</sup>

鍾<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>みか<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>や<sup>ス</sup>み<sup>ス</sup>壁<sup>ス</sup>前<sup>ス</sup>て 重五

芭蕉

度<sup>ス</sup>杜舟<sup>ス</sup>の附<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>杜舟<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>室<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>附<sup>ス</sup>へ<sup>ス</sup>よ<sup>ス</sup>あり<sup>ス</sup>  
家<sup>ス</sup>附<sup>ス</sup>へ<sup>ス</sup>千<sup>ス</sup>眼<sup>ス</sup>一<sup>ス</sup>到<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>かき<sup>ス</sup>な<sup>ス</sup>度<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>又<sup>ス</sup>世<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>変化<sup>ス</sup>かく<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>え

少<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>お<sup>ス</sup>地<sup>ス</sup>藏<sup>ス</sup>却<sup>ス</sup>田<sup>ス</sup> 荷弓

芭蕉

前<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>物<sup>ス</sup>の用<sup>ス</sup>住<sup>ス</sup>候<sup>ス</sup>身<sup>ス</sup>町<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>主<sup>ス</sup>地<sup>ス</sup>毛<sup>ス</sup>か<sup>ス</sup>言<sup>ス</sup>淋<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>え<sup>ス</sup>た<sup>ス</sup>

是<sup>ス</sup>地<sup>ス</sup>藏<sup>ス</sup>町<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>通<sup>ス</sup>人の中<sup>ス</sup>花<sup>ス</sup>より<sup>ス</sup>見<sup>ス</sup>が<sup>ス</sup>有<sup>ス</sup>財<sup>ス</sup>訪<sup>ス</sup>湯<sup>ス</sup>湯<sup>ス</sup>

八

杜國

勢いのまじめを覺ゆる内に身を為さつせりがるもの。もとより年遠  
觀想の匂く子を失うある人ありてす行旅をなすすめ。ソシカレ  
ハ山魏々又不裏あ

かふろいみの未だまかひ角き 野水  
先づか女の愁若之所心へ嫁のあらと見てお全を生るよと見て、いとうま  
るえかりゆりす。やあまくとあつやうな大ナラうしてやうて嫁うなう  
とそぞのまらめくうじまく

### 櫛とこま帰する行かなのうある

荷今

先づ火を抜きて傾城の圍と附こう帰するをハ正力もうちへ<sup>ト</sup>尋あ傳之  
うくじも已よ残鴉とて 菖蒲

時假の附

### 三線かん不破の国人

宿五

是ハ前々の圍と附く事と附く事せんとあすかうハ三線の外の外をと  
日く「まちゆか」三線の元旦とおもむかくあることをあらかじめと聞の事  
眼をと熱中と當ねまきう間へ就きうどき

### 竹條あくに柏ハ柳の葉す

野水

前々あきぢう佐あきハ不破の國と場をまわはうと三線かんとハ風犯人  
のものゆきうへ

### 辰未かく美濃てホルも真名を忘る 菖蒲

前々の風犯人ハ四ものとくめす不破の國とハ三線がんあらと身

又夏のうも「まちゆか」三線かんと柏原の境を越えたら氣質も一向かまは

### ねすみのうたとも七十 杜國

杜國

物高めとりつゝ年をと附くうねすみのうたちの「景自鳥」さて

七十も「かくうもの」やくたりとあくあつれ

### 奉加め近古章まへ金うちよかひ 宿五

宿五

前々の人さんけの心を生じてもうう黒ぬ世の中をあきとめてあるが  
とお奉かうは山寄附くう

### じとへり金華の下畢りよひ 可無以

可無以

前々の金を遣いける人のわへうすゞまあるのゆてりの牛すこえ  
とお附くう大きくう

### 蓮池よ詠唐のよ蓮ふ又ま等 杜國

杜國

前句を夏季の文として見て改めて今更に今更に

まよをつらぎをす

是「水」也。十之八九，皆以爲「水」。

荷兮

是ハ前りの城すく人のすまうこよつうくの城人すあじにまづて高橋の  
城を降こう一と事ある人物あらへて高橋は況えりやうものゝありし  
中華の人の多ひ只くもくと巻上て其の身よやと來きまく一方まことに一  
わゆるまく

萬物をあらわすに爲濟を  
すり  
すり人物となつてゐるゝ事そ  
水注髪の赤子を臨瀆禪師の母とし又臨瀆地とす  
日逝ス又諺子をく行しませやまと侍、巖を越  
秋中 の虚むすきくあつかひハ

野水

浦子集得ちひてハ吹へぬ事多有又靜さハ云フシテ  
トシテモアレハ次ノトキイチカ

若の実へばふやうづち

この物と定め、美濃守は、人を呼んで、  
あらう、曲侍の爲め、内侍

杜固

前々の墨客を教わるや仰り以て「千眼一剣」しかばにて  
内裡上崩の様と見て取る。日不足すもの。口くも  
注文治二年四月立日後白河法皇小原玉法華の時ニ女院曲侍の内山跡ニ出  
て捨つゝ草の花ある。わづへて山を下りさをむよこもれよ山へんしをま  
但し馬、曲侍内侍乃今歸馬長持たぬ。かううけ詞をもあきへまき

三ヶの花鳴鶲ヒナツバメあとのみ自鳥シモツバメ、  
重五  
朱注此三トトロハ三日あるとトトロしてあまゐの女官無度ムヂむらわい内裏、  
鶴会

考へがみりやも哉の寫活外

荷今

冬の日解ミヌエバ松江ノトコロ今とえて其爾々の產物を貢奉す所内た  
リ御の羽衣外ハ貢穀の熟語も多ク一月ニあナク御れハ祝言シテ堅代ヲサ  
マキテ御く者かくいきもハ白髮の先眉もほして首を奉るありヘシ万  
民至徳を仰ギカラシメテ御てなきば代ニトリテ。冬注越後より白神明神  
又鴎治亦明神ありこの二神中あれやとされハ神軍め、焉モ白神うど  
を好む事ナリてうとかくハうどを外て白神ヨリ献ヒ和れシムアリ

「元をしく事僅よ十步  
え、アヤオ、アヤ  
朱注志くれのルレキモ一句ヲ先づと之へぢり。先づ以て走焉歩

月を爲す

杜國

水落轉變のせ、中を報じ（たまふ）  
こゆく、ゆく行ひの、あつま  
重五  
あれの、今まで乾ひぬ冰の、ちよちよ、人、と力が、うつりんし、き、そいあ  
つまふ、わらて、ぬぐの、はねきの、く（く）（く）（く）（く）（く）（く）（く）  
止蓬の葉あと初狩人の矢よ負て  
野水

第三冬、百解。解曰：「此乃序之大義也。」此言觀志。  
主客對答とすて、將人とつけどる甚ひともきあひ。以猪人を承ふ。行ひあつ  
まよて、もじらむる時、感概かうむはさてり。市人の物商と詣するもとくえ  
猪師の初教をこころみゆきて、蓬萊の筆を胡麻にうちかへり。其の門かを執  
ふ者す。たあ多ひ。画多ひ。如。朱注詩句あれ。以上の意とすて。猪師の  
初教を経て蓬萊の筆を胡麻にうちかへり。

卷之三

北の御門もあたる君

卷之三

馬糞接

御門ハ通用の出入口あり  
寧門ハ紫宸殿の前  
金匱官公寔の狩を勅ると見えて又勅をり  
糞桶あわきよ風のまゝもみ

荷兮

あらのくやしあるまむたりもみをとく人をへまきお  
うよはのあかすみつけどう者真いともへかくも  
あくよ竹本をめみて正筆サシキをかきのすうあく

茶の湯者もむちの蒲公英 正平  
掃除とすきを見か  
不淨よりぬりゆく。まほやく、ハ前を差しソムク桂わくまほ  
らうひあけよねとも娘うつぎて 重五

3

前句の他刃のせんぬと云ふもめがけて抜きまくらあつて  
がりぬけの附、いはゆる「御前」。朱注うたけ「くわく  
さうあく又方氣」。一つき。『仰御』二次句の体親うさま。

其の外に  
其の外に

杜國

何丸のソアがくくつもお車のあらさまあ句文の日解コハテの娘う  
みえがゆのまくへトウロウのもやくとんとものやくよして送つたまた  
男よりも同くトウロウと書きて送つたものすきじやもこじよゑを二人共  
男と見るもゆゑありつむきとん。余注二人男の侍「火勺脇丈をあ」と  
あい、も狼狽そひへてうの左和ものがくの二ノの男ふ志トテ娘フ侍  
つゆり翁のすまよ方を構りぬひ

其處を喜んでおこなひし、誰か天牛の坊

秋のすすみのよみうりは秋れづれづれの  
ゆきと見て前りの場をすくすくあつあつさのやうに即席の  
坊堅也市行基善蔵よ勧進をして太仙をつくります

朝日夜双うちの旅館 杜鵑

久の日解前夕志るトモシニ幸事のれ流すを双六と云ふて附く  
勾玉・赤石・ササ・坊主等あり乍ら之に信牛のニシナヌ双六の社ひを白りを  
多々ヘーヌアリソラニシテ高井の酒さくあらむ都く水にすまがれ  
御衣冠す時母のまく  
荷弓  
鉢の如きはよみがへつゝ時もとて季の如きはいづれも初が秋の  
独坐まゝて口をきくすまへんの風情あり

余猶の又未だ未の人に及

金糸の事よりあづまに其角をうけて、じあつ衣裳をかたじづき、商人あく  
所は十眼一到、心志のあまらハ世と恐るべからず、渡へまつあすへてあ  
りとが所は二ノ、もとをよしとて、一人をひきゆく。

金糸の事より半あんとて

重五

前々まほ所長人と見てゆきりの金糸、助力すら附く難い事あると  
お見せ、職人あぬハ雜の附く又前々たゞくもる季あても見え室めあわづれ  
しきうふうをまけへし心得りゆきへさるよ、又金婦、今の世子内侍の外戚もの  
を差しめ守備を務め、金婦とまこと、海上人以下、女あり、金糸、あとも聲中

よあひを内侍仰りてよ私の事とも余物としよ  
それを外侍仰りて少當寺  
も禁中より侍ふ女房のゆき内侍より次よ帝下りてさうすと其中に余ふ女房  
人をあらわす右御内侍さうとつるを老又命婦古事記傳

前々年秋より禁裏より移出ひ余とつけぞ。未は大伴王子、  
草

佛金玉勸解

老蕉

縣子も承見汝即行かれて室立

卷之五

爰よりせの城裏ものへておもろひをうながすものもかうすよ長  
じてある御ふ五形茎の生いはくとひまほに住む人の地所之  
うきし草味る雲雀ちり

吉野の馬のね、うに白つゝ

野水

おのぞきや矢矧の榜のあとのキハ

杜  
甫

駄路の馬のねぐらをそしの長さよりうぶへてすく。  
尾はあるに引ひて人の口をほじりぬく。日本武家宋使の時矢を制て奉  
るまゝてあくびに囲りをうよておひびきに以やうすめのやう。年注：日本  
第一の長橋長さ三百八間。

庄屋の店をよりて送りぬ

北齊書

冬の日解よ前々のやうもとどりて下よの松哥を見て御くわうをハ元の  
ああゝの秋や今年かえの賀礼あるあるよ松よする松哥をも送りやうふ  
もん。朱注矢矧う里のせやのほ前よ大木、松あ、吉住の娘やけろ

捨てよハ余哉  
長弓のひき

野水

人、松のこだま、音をきいて我うずとおじいさん  
老松の下まづくわくわくするつるぎの音

馬首刀鋒  
年年奏捷

卷五

日は太陽のままで、人間の達者であります。内  
玉、やあんこの年の年しかり。生

雪の狂笑の肉の竹をめぐらす

卷之三

家ハかシやすも雅ハくよ淑女の對ハ之高雄の片袖をもレく人も同シ電見の  
狂人ニさて内シ意ハたシあハるシ淑女の袖をあハつキこちよシムわカくシ也モ曲の  
あハるシ具の雨の笠まま着わらシ人あうシきシ也モ。是因ハの笠ま高乘タカ乘ス立タ朝タマ群ミツ東ヒタチ也モ  
あハるシありハ。未だハ雪見シタマの風狂人ハ。片袖をゆク禮奉マサニ也モ  
あるシ人ヒト於シテ指シす。吾ハはシ人シテ也モ

おみくじ 指す 番のせん

也同電  
行毛曲  
群羊東  
室五

家へ現やの大さ玉をとけ、  
遊女。袖を差し、おおむかに  
て、いさむ。おれんじあは、  
おもへぬ。おもへぬ。  
年は、いと、楊花の休めり

考のじゆへよろこび  
教の一徳をうき化とせしもの其家傑士也

六

三日力の東は晴く  
鐘の音  
芭蕉

袖湖がまの琴うへき者

野水

言ふ事をゆるして放り去る

杜國

ハセハ沙東之星  
秋三十九年注琴の清音を以て釣たはをを放つやつ  
かと妙注よし  
冬の日解り  
うもむづ

靜より念ひ  
人也  
背行

おもしろいへりやの第一  
宝五

前々の夜のやうな店あつたしも元より花の一つのあつたと  
きよ白いの花あらん。花のゆきはあつたときもあらん。ゆき  
もつやあくは思ひあつたがゆのあらあらん。あらうく見えばよ  
まと。毫因多麻之比トアリ。よもじいのよよ譯る。

がおもてまゆ  
。春のかわい  
さとくらべ  
もううらは  
あましもんじ  
るをかへ  
花のゆめ  
をあつめ  
あつめのまこと  
思ひあまき  
ふのあまめ  
あまくらは  
まくらは  
麻之比ト  
よもて  
いつふよ  
語る  
そのまゝと  
我もわらへ  
まよせ

北夕西上人の辞世をうんで二句一章と我も同く  
おうみあい心。書うば、難有以戰國の時よりかや。お辭りてはあらず  
とこ。余注西行上人顕く花の才とて春北野其才の壬申月の頃

取る波津よあし少焼家すくちやかと  
余注万葉集よしゆ人丸羽ヒトマルヒタは洋ヨリあア史シ家カすスルをルセセ妻メをヲヒヒトトシシきキ  
**巣**のの一つトコ黒マツがガめメ 重五チウゴ

此ハの心ハおのう毒ハラスニ黒マツがガめメ やハ黒マツくクあアいイとトゆくユクニ元ハラスのハやハ  
のハてテよヨはハとトまマすス一ヒ口ヒ黒マツがガめメ そソてテ外ハラスのハものハ白ハラスくクうウのハ妻メがガめメ  
リハ黒マツいガろロシシとトあアらラ一ヒさサしてシテ あアいイもモつツとトやヤとトめメリリのハたタとトんンてテ

いとめ難いと漫席石之  
背行

いとめ難いと漫麻石云々 肴荷行  
金を傾向よそうさて勢よりはよい善をもつておこうてあ  
ひ樹をさすむを直つてくらしも方言のまゝに「ま  
る」が「あく」のまゝのやうな「ま」のつゝ音をたゞさ  
花蘿 馬車のやまと呼ゆ  
杜甫

萬三鐘とさの召まからうの場に粧いりよ花と白りせきふふ馬首の  
雪をしゆかきあうさて花枝の喫かりとすて女の粧いだる夙情とすあり

### 鶴見る宿の内かすのふく

奉つて衣改を忘先づれき見る鶴をもる心のあらう心へ花  
弄つてかきよ鶴の身の大きさをとり合をだる之冬の日解る前々を仙  
境とぞあしゆうとす。末注鳴鶴有陰故从雨鶴好霜故从霜

### 風吹ぬ秋の日瓶み酒あま日

前々寝裏をとるたまきあれハ淋く隠者の住居と附くさて瓶み酒あ  
くてものうへと大あふげを吹ぬとあく吹の下毛があるふしの末注吹  
ぬのぬふのぬうあひ手ぬりぬる

### 秋隠るつまを市ふ振する 羽笠

前々を金家と見て薪をて脚はうを市ふ振すうと。末注秋あふが  
散りとそまめり薪までまち里を市うがしてまつするうすら根臺ト

### 秋岩川や胡麻石千代等微近

荷弓

前々の花室をうりありくハ登れ而りよ詔向。末注前々の竹を斧の  
つくりものと見しの又上加茂の川上エ稻荷の詞う其神胡麻子好三その

あうすおとを極うす一歩す扶すすめられ

### もくらの六年あつしの頃

重五

秋岩川岩倉對々あう。岩倉洛陽の四方よ以て称あうた。王都鎮護のため  
一切の経巻を座藏の地ニ又石藏トモかく。末注岩倉。鞍馬よ近き者  
て加茂岩倉。洛外に奈より知音も未よかしこ

### かひよみて布拂哥よわくまとて 野水

狼の情ううあくていいううあくあうういあううも行かひを生造  
ちううううて布つきすううう

### うきハもあうちと説る 三平 杜畠

矢のううううみのううううううううううううううううううううう  
リとす。末注もむち。札記二十而嫁ス。

### 捨ふみてくわらうの群の離れ鳥 羽茎

矢のううううみのううううううううううううううううううううう  
時すをよみと離れ鳥のうちを我みよ思ひをわう

### かひよめ丈達あきんをも 並蕉

前々 情を起して、こゝヨハ夫をかゝうえり夫ト別れあつた女が、於は  
所にうちあらぬたまつておきと見えし前々の事  
でくさむと、よもよもえもよもがれたら女あることありて、かうううえ  
を冬の解の地の因よりはるもまきて、這をして、いふひがく

ノリ牛ひみゆ成子うろくのれる 壇五

き家をせは、處て自分を考慮して、すて室へき使へかへゆうちの門  
守の役をねど一郎をめぐらす。中がりぬの門守す。あやんとを今  
ぞもじのま花りまくらうへ

血刀かくに力の時ヤシ 荷行

家事の若ものうとうの口論をしておふをもこしかくの店へまきまわる  
しき附うの力のうさり大きうそやうけ

帝アリテ本即の時ヤシ 壇四

前々をき家のき教やうとて、こゝの戸のをばあねうそやくと武家をも

あくまうも人をあらわすあれ、と草場を定めたり。闇をあとし、青葉  
をあらう。アリテ、月のうそやくとふうつに降す。時が、う波あら

ふゆすりぬをあくまう

野水

これ、全然の所すと聞かうへキ

ソ花の注 櫻の櫛とすとまくらる 篠蕉

此夕解いかに、大鏡をたの解もくくし、もの、的當せん。おのきいの言を  
おもつて、前々を力のうつて、行こうともかくと親して、とまう事だ  
を観じ、春の底花をくじて、かき集めあきくらかじものをくらむ。松竹を  
そよよほと吹へきう。又花と桜とて、うつに、山吹のやううつるものを  
さて、寫す。もの、独創のうとすて、仙道に入らす。

傷との以まれ、韻冬を 吞 羽笠

前々の花とあくと、独創の心模、かじと、おもてのあくと、尼モかと、おのきいの言を  
仙門に入らしと、もの、いもほと、うき世を文つし、め風情ありて、山吹を  
のむ。口あくと、かほうとくつれて、つむ、山吹のやううつるものを  
むすべて、草の詠あらうと、うき。年注山吹の歌得、からかうと

白燕湯らぬ水と羽を洗ひ 小荷今

山吹を瓶中とお邊を附う。白燕湯らぬおもと、白湯、うきはまかるもの  
を、いき、前々の歌得を詠して、うき、寫す。又燕を天女とす。

宣旨かこく釵を錆する 壇五

白煙をまくとかめで青女をかまいよとかくアサムラシハジン一説以ハメハ  
のくさしのもやううて白のまつ錦うとうとお説あり

八十一年を三つ又もうちて

八十一年を三つ又も立てまし  
母もちて野水

形があらうてむる七夕のま  
見て、まことにまあきの雨あらうしてまづよ

あてて又ひは基こふ宵あつまて辛牛と牛を打せ一年立まくまくをゆ  
うとくと前り。望くものよあくらうるの。朱にあうたつ。中隔の畠谷あ  
西 南 よ 桂 の 花 の つゝもとま 羽竹立

西 南 す 桂 の 花 の つ わ も う ま、

薩摩のあくよト木うり音  
もと城

卷之三

財を家よ隨あら女見て一の  
重五

財を蒙る間ある女鬼へうる  
金瓶の靈をあく日の晝  
本操ニ曰孔子蘭の房へうると見て王者の名高しとして琴を教す  
女の用うて葉あらぬさへあくと金瓶玉ハ仙うけむ

り豈女の書事あるべし。年注矣女の件トあり  
トやうまえ様のがたる正力 よ 杜翹

おまえ様のがたる正月の  
やうなもの、封々とせあはは正月のもやぢこ

此二句あはれしきもの。對々こ付あはは正月のもやうこと都事  
あらごとあはき者、正力智日親族を以て至おほて年をかう直ちハ迎新と除  
くこと正力のもやうあはきその末注庖瘡もしあのまあいの正  
月を仕あはるを祝ふあはくし栗はあみ様子のがよし。語りて入西和

つゝみむ向う年一度の宿

田耕事より百井塘雨の遠古を下す。山雲穴深の城より磨尾組の牧としめ  
此地名慶誕生の父とて春湯のみ有其靈を奉る社也。之この年注より始つ

つまハ鞆う又ハ包ミラリフルアリヤト

宣の日以旦を金剛う急哉て  
芭蕉  
朱注宣の日を終ホハ刀工の常ニ宣の年宣の内宣の日よりおはな力を三宣と  
て伊豆播磨エ納めし例ありトニ宣の日より明ニ若化を金剛シテ芭蕉の  
宣へ詣テナラムシ

### 雲うもすす南京の地 羽立

批々ノ御怪ミソヘキヨリ其の干將をあていよを南京の地ヒハ附ナム  
南京もヒ吾地あるハアキ雲うもすすきモハモレシ楚の周王うカ地ニ王矣  
あらモモて金を埋ミテ日を鎮ミテウニテニキを金陵ヒ号ケテ即今南京  
あれニサルヤハ一夕の夕ニ雲うもすすき仰レシラタベヒヒト名ノ月  
鮮。朱注高麗劍刀主良刀ヒソハ南京ハ南京の主ナトテ李良アリ

### このキーライ誰と考メ人の像 背弓

此ハ南京を主良と見て旧都あるハ誰と考メ人ノ像ヘ坦ゆアリニ  
朱注秦良の町を借モアリテ圓籬シテ秀吉公の少太和太納言の像考  
を今ハ此のもの也アリ也モ之

### 泥よここうねきよキササギの根 重五

批々やうりくへすく像のあら外傳ヨリハ冬の日解スハ心ヒトシナム  
つみて傳主安達スル在室のあくハアキハヒトモリモヒトシナム  
ソシテナムシテアキハヒトシナム

### 弱するあくつヰ花よかとあ

やす

心のほきヒヘロモ清金陰逸の境界モテ附シヒト

### 狩衣の下ニ鐘ニ春風 芭蕉

前々の御するヒリカニ陳中ヒミヒモハシモアリ公卿ツ軍ヒミ拂曉の  
あさ王羽伏ナツサキ年ヒ日ヲシテアシマシ

### 北の方あくく芭蕉おやうて 羽笠

支の初陳を見あくる羽林カミカモヒトシナム

小の方のものかヒイの件ニタ一ミニ

### 新しきぬ夢を夢るむれ雨 杜國

杜國

雲内や 鶴のそとあくひみて

荷今

暮冬枯れのまゝうさいと言外の物を書いた。鶴巣漫筆の土方を雲内とよ  
す筆者傳ふえへる。同書は三月を雲内と書ひて、雲内と書けと  
雪月と書く人あつた。年注鶴鶴亦夜鳴又蛙抱色鶴抱影

父の朝日あわれうる

芭蕉

白子くしよ日え光のあくみぬ心詞うらう俳あく登りとくけて一首。  
かく仕事くもんび俳うりへとく。年注此一集の物が狀似ハ余情をいか  
く冬の日えり題号も墨かトはるものじやく又詠すするハ都もは  
ウをましますへし首うちをした鳥うしろす鈴日の終さしむれ候を  
あつてゐるう

桜捨山家の体を木のキナ屋

重五

第三の三の扇の扇の文字の三つがまのハ一句のまゝ紫りやうあれと

も下のとまくぬつて次の内へなすべきたれ。次理を重る時ハてとめ丑  
とさかをきうへてとめ。第三もしりて桜をあくしより。山家の体を云  
ふて第三あく。年注田家うら山家の体トヤヒ又木のキナ屋ハ今  
あつてゐるう

いきすみしむ極みうれ

杜國

四ヶ月前々山家の体トソアドリ塔をもこみを附く。引すらくりあつて山  
中の嶮くきぬをとる。年注前々の本の手づ降る。見ゆるくいきもの  
風ふ向じる牛あねへす。浮ゆる又こりぬく。ハシマシモコロ  
体。あうづくこつて立あたもく。みる要言整日牛走順風馬走風

音もあそ。身口よ内のうじ

羽立

附心北條家う。武田勢を塙責子へ。年注前々を陳ヤの糧塙  
と見て。風俗通曰。足の地。南の風子して日暮有耳。牛の熱は若も披月をえど喘す  
足とくをそぐて太平の吉代と改て祝い。附本。一ゆかりとて。冬の日解局碑。かくいにじうを基局かと雖異を説こうりとめて。わ

秋のうら旅の店連歌いとがつよ

芭蕉

酌う童一説。あうちも酒も。又前々花城のさ生あれとも音もあ。真  
足とくをそぐて太平の吉代と改て祝い。附本。一ゆかりとて。冬の日解局碑。かくいにじうを基局かと雖異を説こうりとめて。わ

漸もまこと寫すとわら寿

荷今

前々旅の店連歌と云う。清見寺の名をもて場をさため。二を附ある。大抵ヨモ  
リホトモ。モトモ。レタケ。モモモのものある。

旅の一家の方をもへる

辯とて椿の花は 菴る音 杜國

前りの寺としゆの服をきて椿の花の香をまわす時へい寂しきと云ふ人所もあつて

かある事遊きぬる風の香 重五

年注草の本と多うむちよ。今と解釈草の匂いと枝を匂ひへと

雉子退ニ鳥帽子の女 五三十 野水

前りうらうやう春の春の外候もんと附記してあくを思ひよどむ。年注ニ義仲・地主とや。

庭と木と竹とおひの音衣 羽笠

こハ太名の長者の別荘あらへて庭と木と竹の風景をつくらし。京の

うす衣とがすと妻のねいとん五三十侍女あらん。年注庭と木と竹と

雉子退と動うれ又夜の音衣と本と山の風景をつくらせる花子と扇の奢

あらへ

あ川よさき山 橋とよさくと見人 荷弓

夜のよさくと見人とてのめて立度つけり。木と山の志とろとをあらわ

さと附山橋と橋さんとて山中の趣といも、前々の人奈うみとての様

さんとこの大和本草と平地本ヤ、冬半ナトアリ万葉と山橋の奇三首あり

畠解ニ山橋と前耕孟ニヒソウ。歲時記ニ山橋豊橋共<sup>ノ</sup>万葉以上杜舟の云々名

あく見空を人曰本朝上代杜舟もくらしや万葉古今多詠也。然れど考れ考

八雲古抄ニ山橋と杜舟もくらしや萬葉山橋万葉多詠也。年注ニ山橋

杜舟もくらし又山橋もくらし

麻うりとよの歌の音ああ

芭蕉

寝度つつきと獨見ても浮山幽谷の佇とて云はほろんと匂すと歌

の集あらひとて座りとてひそく口をまくとせらるる

江と近て獨坐せよ煙て

室五

前々の集あらひとて董と江と近く山とあらひを極め自他集をうつて

うちよしありと拂はる有はづ内

角と武笛と落花を拂

羽笠

前々我身がどうとよと嘆嘆の罪人の左<sup>シ</sup>セシキとあらひ是て改らざり

笛子落花を拂はゞへと廊をうのせらむ。余注衣公脚の因人未  
だて笛子落花は落梅の曲也とへ

### 竹籠樂ゆるじ木川の山あい 郡水

前々を押出して所ぞ落葉こゝに寧ニしあるべ木川の山あい。量株をも  
わるあり。あい間こもれぬ。ぬひたに阿比郷トう。余注落葉ゆるじ  
落葉こゝよも出しまづまちこ

### 骨を見てゆみ泪ぐさうちかへり ソサ薰

前々の左近の人死ぬの骨を見て我と如故屍と暖地すらさんとく  
冬の解るハ樹下石上を極きあは雲水斗莊の喉舟と稱くと注く角れ  
下の余注あはり人の余注戰場の傷と見てそのを由緒のある鶴鱗を  
食のこのとくまでつみかづくあはり

### 泥のうへよ庵をく裡を捨ひ得て 杜鹃

赤々の乞食うのあは世於くとくにあらうへと裡を  
食ふともかくやうんとてみのとくとくあらへり

### 落葉よほむかのこくすり 重五

泥のよみ魚を浮す。柯持つ落葉を拂ひて泥のじきよ曲せ葉、頸を毒を解  
す落葉をすらと化しき。余注川狩の落葉をもんの又養老の勝をとつ仰う

### 十六よてる年。不角至の花もろ。野水

水の落葉を云う日千鶴として殊のてうとハ夏日長愁民とよ時節あは

### 芭蕉屋あはりよ巖園へく。臼羽 羽笠

會釣り附こ十ヶの花をそよ片側町うそてうの落葉は夏はの巖園つ  
くとくの家の日あへくも見はくころうすもく

### 芥子あまのナ坊文くわおむきて 小何今

のもしらこたんづくあへくの落葉をもくと落のせり落ち落葉に  
落葉は十ヶ下のかさや落葉をかさとくふ。聞葉通言之報氏あはり

### そよく落の実たてらもしの實 茄蕉

尼とナ坊と云う折るまると柏の木付へ。但度大寺の庭前に附へるもく

### 老つうよ殿其堂のそく朝の茶 重五

前々の落葉を拂ひて落葉を云へてはるのそく朝の茶

ゆくゆくおとく  
ねやうあらま

杜固

釣柳子 飛梧葉 十三片  
露氣獨迷山家風月附  
釣柳子 狼子青十三  
前句之三  
金玉家

三月の喪入

野水

正の草紙  
表入るを、多くておれの見せてえ政と叫んで。主は元政  
が母は往へて、至孝寒きの母を夏してお送りする旨す凡流のやうな俗名井  
正之丞ニナウオヨリ山家す

伏見本団の金鐘生をうけ  
せむる

金華先生集

伏見本榜ハ汝草の花を以て又名をうち。ちりひきあるゆゑ。汝草は墨怪  
さくらうけい。古今の汝草の墨画の精一。心もとなく。墨を落す。土生

杜律

妾の鐘をとおりよ入相を見か  
心の猶を書すうすのトに猫の帰りや  
をへあやくはへ捨てぬふくあらへ  
春ノ里猫をあよ秋ノ如猫里をあよ  
春の老けすの壁をせよ

此の父の日一部を一巻を見て終の木永と對りあつてあらやい本  
や狂々と秀り先師と聖母<sup>ナカニ</sup>もゆづりをすらぬふれ千をまわて秀  
多<sup>タチ</sup>すまやくとえ。水干ハ<sup>芭蕉</sup>、あらわづりへ

あ干をくち句の駿玉 まくやうのよ  
野水  
の日一部を一巻を見て巻の木札と對する所あるや  
秀りや亦と壁掛りゆゑまとしもゆつりをすらかよお子をま  
やうとえ。水干ハ **芭葉** いわゆるつり

缺あり勾も冬の一部の差キ向とあくべの猿の聲の事と山葉代を匂ひ毛を出すの  
風氣は似ていふものあつたるが、此の後は、此の後は、此の後は、此の後は、

追加

の事より其の如きを  
也教

羽竹立

とさかよひをちやせんて　室五

捨てまへ言をやつぬ  
露  
杜内

銀子 牛久  
月 海  
芭蕉

芭蕉 杜 应

その一處のまやしうらが之前よりつゝ見えろ人射弓をりあよ内  
海といたるて氣力のなまありとじえ海刃の晴天のくさくわ引放  
のたましをかうをとあくし奉る軍事の体多々しが銀を餘りふい只  
人まみれひと。朱注大塔の宮あとの源氏おもむくへてくわ

いあゆのむらとすみは阜山  
野水

生木橋の前をもてそのノリキをあわすまぢの附二の朱注孝右の焼塙を  
えりへて左ヨ持をすみれあとは阜山とこと表もがのときハ左所地名を  
す舊川の一格ニ

附言太山杉形の幸平向よりまことに仕方あり

歎笑本のまゝが、書きてゐる

書寫の筆者  
筆流者の節枝の假字のためへるを元の高人今は筆枝  
本のあやまつをあきらめて今をもつてか事ちりま以よ  
しへめのうううううううう  
一すへてハ妹ちくさくうじ  
多かくうきくとおながくとれ  
一あの色きるより  
ものゝ名すハあくね  
すへてしもすいのね  
一舞享甲子の年也枝とあ  
今茲昭和四年ま年よ  
百ハあれハ春の日の巻  
百ハあれハ春の日  
の標題よきうて力あるの序よきれハ冬の日  
多かくうきくとおながくとれ

附言

一七 部のト みあくまでミルカがよきにんじよ  
さをすゞし まろやかとヨロキとナ、あめいんこそ玉  
うふへの ねめよ あくめ

一セ部集異本さへあれとも元禄土年宣の年書肆あつ  
や承之様うそりころ大本を安永年間曾尚堂子周とい  
へる書肆ホシ小あゆうつしか一からうのせよあこあはる  
を今ちくさくとくへつ  
一セア集ちうさくの全き本又あやふらば但一蓼太の冬の  
日解誰うや有ルんセアさうし棚ハタケさうしみかあもし  
あうものあう志れの何たセア集大鏡タカミみゆみをか  
きてえのいさを大いあ  
くよハあふて玉ふりへのたよりよいまうくもおも  
りまひことの人の多かへるもあやあめうもあくも  
ぬゆゑ若城章りてよもねをねよけ人のかよわる

一七部考あるトドレシヘモリキミアリ  
一おのきをこがましくもこのちうさくかきてハ人笑へ  
のくともへあれどもかく一ヨリヨリよくもあきあくく  
もあきあくつナツ、さてのちのよき人をまのそ  
ソヨヘナカクるものハシテアトウのよみてハ  
またおのきへることをあしにどうあきさとく人さへか  
ろをかのきうふをいをのをときらむていうてときつ  
くへきすへて初ニモノするハ後の人の  
あつきみうきヨリ

一流布の印板の假字のたうるをその處今改めて板  
本のあやまちをたすけて今度もうたかふるまうきい  
トへのつよよりて改め  
一すへて狀ちうさくういくしきんもとかきたぬハたう  
へることあるがゆきをしたのちそんへよくだも  
よ

一おのれのあきるよハ人よくあらハちうさくいも  
のく畜ふハあじゆくすへていちうきひのためまん人  
一冬の日の巻ハ真享元甲子の年七極とあり今茲明治四  
年三月廿日ハ於ハ年十九ハ春の日の巻トニ二年先ホ  
水と春の日の櫻顕よリて月あるこの序よりのハ冬の  
日のよしむらうき

冬の日 真享元甲子年 義仲寺翁塚  
春の日 内三丙寅年  
曠野 元禄二己巳年  
猿匏 丙午 三庚午年  
蓑儀 丙午 四辛未年  
猿儀 丙午 七甲戌年  
猿蓑 丙午 土寅年

芭蕉翁、三字、石碑、其時僧丈  
草カ筆ニテ其角去来ノ筆建ヌト  
ヤヤ廟ノメクリノ石墻ハ百川法  
橋經營ニ行狀、碑文ハ角上老人  
彫刻ス芭蕉堂ハ芭翁八十年ノム  
カシ蝶麦造立ニ葉津文庫ハ百年  
今沂凡成功ス右蝶麦ノ説ナリ

翁、諱

臨濟正傳中奥菴蕉翁開尊長老大禪師

正保元 申年

伊賀國上野松尾年左門ノ子息 薦堂家中

寛文三 錄年

翁二十歳 京、出ル 松尾伴七ト云

延宝元 丑年

一三十歳

以間宗因風ノ能諧一説泊船堂室房ト云  
又北村季明ノ執筆ラバ東都故キ桃青坊ト云

天和三 季年

一四十歳

深川に住 古池ノ吟ア

貞享元 子年

一四十一歳

寒土栗 冬ノ日春ノ日 駅晒能行 甲子紀行  
曠野集先

元禄二 巳年

一四十二歳

奥州北國行脚 奥、細道比左古猿三の深川集

元禄七 戌年

一辛巳歳

十月廿二日難波客舎ニ於テ終急栗津義件  
寺ノ葬ル 燃香三百余人晋子終焉記作  
十月十八日於義件寺追福佛諧四十三人滿堂  
大津腰所 京、嵯峨根津伴契ノ連ナリ

口年

附言

一七部のしふまくとて三多かくよきゆくし初め  
よきをよしとてヨカラキをヨカラキとされりんこ  
ホシキハへのたれもあらめ  
一七ア集累木さハあゆも元禄土官の年書肆みつ  
つや承當う

卷

三

四

洪川先生集

